令和6年度

「少年の主張大分県大会」発表記録集

大分県青少年育成県民会議
国立青少年教育振興機構
大　分　県
大分県教育委員会

はじめに

昭和五十四年、国際児童年を記念してスタートした「少年の主張」は、中学生が広い視野を養い、物事を論理的に考える力を身につけることを目的に開催され、今年で第四十六回を数えます。

今年も県下の中学校二十七校から千八百六十八作品もの応募があり、テーマは、自らの体験を基にした地域への思い、自らの挑戦、人権や社会問題への考察など多岐にわたっており、中学生の皆さんが日常的に様々な事柄に深く考えを巡らせていることに改めて感動を覚えたところです。

八月二十二日に佐伯市で開催された大分県大会では、約四百人の観客が見つめる張り詰めた空気の中、一次、二次審査を経て選ばれた九人が少年・少女らしい飾り気のない言葉で堂々と主張し、観客の共感と感動を集めました。

最優秀賞に選ばれた藏下祥貴さん（宇佐市立宇佐中学校）は、その後の九州ブロックでの審査で努力賞を受賞するとともに、大分県青少年健全育成大会では約百人の参加者の前で力強く発表し、大きな拍手が送られました。

この発表記録集には、県大会出品の十作品と全国大会での内閣総理大臣賞受賞作品を収録しています。多くの皆様にご覧いただき、青少年に対する理解を深めていただくとともに、今後、健全育成に取り組まれる上での参考にしていただければ幸いです。

結びに、本大会を開催するにあたり、ご支援、ご協力をいただきました佐伯市教育委員会をはじめ、各中学校の先生方、審査委員の皆様、その他関係の皆様方に心からお礼を申し上げます。

令和六年十二月

大分県青少年育成県民会議
会　長　佐藤　樹一郎

目次

〈県大会発表作品〉
最優秀賞　心の言葉　藏下　祥貴　宇佐市立宇佐中学校三年　4
優秀賞　過去の私と今の私　河野　夏心　豊後高田市立田染中学校三年　6
優秀賞　日常が僕を勇気づけてくれる　佐藤　大樹　別府市立別府西中学校一年　8
優良賞・大分県教育長賞　私にとって大切なもの　秦　聖来　佐伯市立直川中学校二年　10
優良賞・共感賞　空気の読めない自分　運天　貫大　竹田市立竹田中学校二年　12
優良賞　優しい世界に　足立　優佳　竹田市立直入中学校一年　14
優良賞　空手でわかった努力の大切さ　木許　樹希也　佐伯市立鶴谷中学校二年　16
優良賞　私たちは臼杵守りたい（隊）！　木本　優芽　臼杵市立西中学校二年　18
優良賞　地域と共に生きる　近藤　花虹　佐伯市立彦陽中学校一年　20
優良賞　挑戦は楽しい！　城　綾音　臼杵市立南中学校三年　22
〈全国大会発表作品〉
内閣総理大臣賞　「一隅を照らす」　ケイバージーバ　宮城県栗原市立栗原南中学校三年　24
講評　26
佳作入選作品　29
大会のようす　30
実施要綱　32
審査基準　34
選考経過　36

（大会発表の作品は、原文の誤字・脱字の修正以外、大会当日の発表を文字にして掲載しました。）

最優秀賞

心の言葉

宇佐市立宇佐中学校
二年　藏下祥貴

「もうちょっと指を開いて」
「回す方向が逆だよ」
私は懸命に手指を動かしながら、講師の手を注視していました。

中学一年生の時、姉に勧められて市役所主催の手話講習会に一年間通い、手話を学び聴覚障害者の思いに触れました。学び始めた頃は指や腕を動かすことが難しかったり、ろうの方が表している言葉が分からなかったりと、本当に手話を理解し使えるようになるのか不安でしたが、一年間通う中で段々と慣れて、少しずつ分かるようになっていきました。その中で、自分の手話表現や言葉の言い換えに自信が無く、ドキドキしながら表して、ろうの方とコミュニケーションが取れた時は本当に嬉しかったです。

「私達聴覚障害者はかわいそうではなく不便なだけなんですよ。」講習会で伝えられた一番心に残っている言葉です。私は、手話講習会に参加するまでは、手話は「特別なもの」だと思っていました。私達健聴者は日常生活で手話を使うことはありませんし、誰もが分かるものではなく、ろうの方たちだけでコミュニケーションを取るものだと考えていたからです。しかし、手話講習会で学ぶにつれて段々と「手話」は特別なものではなく、一つの大切な「言語」だという事が理解できるようになっていきました。

ある日の講習会で聴覚障害者の二人が休憩時間に、話しながら楽しそうに笑っている姿を見てハッとしました。なぜなら私は聴覚障害者の方達は自分の意思を伝える事だけで精一杯で、冗談などは言わないんだろうなと思っていたからです。「私達聴覚障害者はかわいそうではなく不便なだけなんですよ。」その言葉が私の中で重なりました。私は自分の中にある偏見、間違った考えに気付き、とても自分自身を恥じました。そのような気持ちは無くても、自分の間違った思いや考えによって、「自分とは違う」、「私達とは違う」という差別や偏見の心が生まれてしまうのだと思います。私は聴覚障害者の方や、手話講習会の講師の方達との出会いによって、とても大切な事に気付くことができました。聴覚障害者の方達も、私達健聴者と同じように冗談を言い合ったり、笑い合ったりするのです。講習会の時に、ろう者で講師の方が私に「この前、こんなことがあったんだよ。」と面白かった出来事を手話で話をしてくれて、私もとても面白くって大笑いしたことがありました。手話を通じて笑い合えたことがとても嬉しく、私にとって色あせることの無い思い出です。私はこれらの体験から、私達健聴者の言語と同じように、聴覚障害者の言語として手話があり、また私たちがそれを学ぶことによって壁の無い関係が築けると感じました。

大分県では、県と全ての市で手話言語条例が成立しています。これは手話での意思疎通のための環境を整備して、ろう者と健聴者がお互いを尊重して生きていくことが出来る社会の実現をめざして制定された条例なのだそうです。誰にだって違いや困りはあります。それをかわいそうではなく、お互いを認め合い、支え合ってこそ、一人ひとりが暮らしやすく、幸せで豊かな社会になるのではないでしょうか。私達は同じ人間として、不自由な思いをしている方がいたら、合理的な配慮で助け合うことが大切だと思います。特に聴覚障害者は見た目では障害の有無は分かりづらいですが、困っている方を見かけた時は、自分のできる範囲で寄り添うことが出来るようになりたいです。その為にも私は今年、全国手話検定四級を受けます。そしてこれからも手話や障害者福祉について学んでいきたいと考えています。

私の言葉は届かなくても、きっと私の心は届く、心の言葉で心のつながりを。

優秀賞

過去の私と今の私

豊後高田市立田染中学校
三年　河野夏心

　私の妹は知的障害児です。今、皆さんはこの言葉を聞いてどう思いましたか？私も本当のことを言うと妹が知的障害児という実感が今でもありません。ですが、多様性という社会になりつつある今、皆さんに知ってもらいたいと思い、このことを書くことにしました。

　私は小さい頃の妹との記憶を覚えていません。だから、両親に聞くことにしました。それによると、妹が三歳の時、周りの子達と比べて成長が遅いと感じ、検診の時に発達が遅れているかもしれないという診断を受けたのですが、成長するうちに戻るかもしれないと言われたそうです。しかし、小二の時、知的障害という診断を受けました。両親に今まで困ったことはなかったかと聞くと、数字やひらがなを覚えるのが苦手で教えるのに苦労したけど、人が大好きで人と話したり、人の顔や名前を覚えるのは得意だったので人間関係には困らなかったそうです。でも、両親が一番心配なのはこれからだといいます。これからの人生、いつか両親の元を離れて自立しないといけません。就職先だって今の時代、知的障害者の人を普通に受け入れてくれるところが少ない現状です。

　妹の将来の夢はケーキ屋さんです。ですが知的障害者は外見から見て分かることではありません。だから失敗やお客さんに迷惑をかけてしまった時の対応が難しいのです。そうなった時、名札と一緒に「私は知的障害者です」という目印をつけるとします。しかし、それと同時に「この人知的障害者なんだからしょうがないな」や「じゃあ他の人に頼もうかな」などという差別が生まれるかもしれません。だから、妹はそれと向き合いながら人生を生きないといけないのです。もし、皆さんがその立場だったらどうしますか？決して人ごとだと思ってほしくないのです。

　私は両親から話を聞いたり、この作文を書いたりしていて過去の自分は妹に差別をしていたかもしれないとハッとしました。それは私が小学校高学年の時でした。私の学校は少人数なため二、三年と四、五年の時は複式学級でした。同じクラスになった時、自分と妹を一緒にされることや友達に迷惑をかけることが嫌で、どうせ家で一緒なんだからと学校では避けていました。あまり関わりたくない、一緒にいるのを見られたくないと姉だからこそ思う部分もありましたが、健常者と知的障害者で線引きしていたのは私だったのかもしれません。

　そして、今、私は中三になって思うことがあります。私の学校は差別をなくす五項目に取り組んできました。小六の時から話したり考えたりすることが増えたからこそ、妹にした行動は悪いことだったと気がつきました。今、妹は支援学校に通っています。そして、自分の考えが変わったことやお互いが頑張っているからこそ、妹が漢字を書けるようになっただけの小さな成長をとても嬉しく思います。それに周りの友達や地域の人たちが妹の成長を気にかけてくれていて、「最近、どう？」と聞いてきてくれることも嬉しいです。そう思うと、知的障害児の妹がいることは周りに迷惑をかけることもあるけれど決して恥ずかしいことではないんだなと思いました。妹がいることで「周りが明るくなるよ。」と言ってくれる人もたくさんいると気がつきました。

　このように皆さんの周りにも自分が気づいてないだけで知的障害者がいるかもしれません。だから、この作文を読んで、知的障害者のことを知ってもらい、皆さんにも人ごとだと捉えてほしくないのです。そして、差別のない平等な世界をつくりませんか。

　最後に、自分と妹で線引きしていた過去を受け入れ、そばで支えてくれた妹に言いたいです。「ごめんね。」と「ありがとう。」を。

優秀賞

日常が僕を勇気づけてくれる

別府市立別府西中学校
一年　佐藤大樹

僕は車いす利用者です。車いすを使い始めて七年ほどになります。幼稚園の頃に体調が悪くなり、度重なる検査を行いましたが、何の病気なのか、なぜ悪いのか原因がわかりませんでした。それから二年ほど経つと徐々に体調は回復してきましたが、小学校三年生の頃に再び悪化してしまいました。そのとき検査すると、ようやくどういった病気なのかがわかりました。僕の体は主に慢性的な疲労感や関節や筋肉の痛みが続く病気です。日常生活で歩くことや階段を上ること、他の人には軽い物でも持つことができず、ペットボトルの蓋をあけることもできなくなっていました。

病気を克服するために、小学校四年生の頃から療育センターに行って本格的にリハビリをするようになりました。そこでは、十分間ほどの歩行トレーニングや重りを使った筋力トレーニング、手を使った細かい作業などをしています。どれも地道ですが、繰り返し行うことで少しずつできることが増えていき、自信がつきました。リハビリを始める前は歩くどころか、立つことも難しかったですが、今では短い時間や距離なら走ることもできるようになりました。

他にも病気の治療のために、毎日決められた量の薬を飲んでいます。この薬はホルモンに作用するので副作用が多く、調整が難しいです。この薬を減らすのが今の目標です。

中学校に入学するにあたり、僕には二つの選択肢がありました。一つ目は小学校の友達と同じ校区内の学校に通うこと、二つ目はバリアフリーですが校区外の学校に通うことです。僕は二校とも見学に行って、どちらを選ぶかとても悩みました。一つ目の学校はエレベーターがないので、学校生活に制限が出てくる心配がありました。僕は学校生活を少しでも自分の力でできるようになりたいと何よりも望んでいました。自分で教室を移動したかったし、いわゆる「普通」に近づきたかったのです。そして最終的に選んだのは二つ目のバリアフリーな学校でした。入学する学校を決めたものの、僕にとっての最大の問題は、その学校には友達どころか、知っている人すら誰もいないということでした。果たして三年間通ったとして友達ができるのか、僕の体を少しでもいいから理解しようとしてくれる人がいるのか、とても不安な気持ちで入学式を迎えました。でもそれは杞憂に終わりました。僕は基本的に車いすで生活しているので、誰かと話をするとき他の人を見上げる姿勢になることが多いです。ですが、この学校の先生は初めて会った時、座って僕に目線を合わせて話してくださいました。学校見学のときも「ぜひうちにきてください」と歓迎してくださいました。中学校で優しいクラスメート、先生達に出会ったから、僕の最初の不安はだんだんと薄れていきました。

ある日、理科の校外学習で近所の神社にクラスの皆で行ったときのことです。その神社はとても古い造りなので階段が多く、坂道で遠回りしなければ僕は境内に行けませんでした。他の班の人達は階段で境内に上がっていきました。一方、僕と同じ班の人たちは、まず階段のないところで植物の観察をしました。そして、境内に上がる時は「じゃあ一緒に坂道から行きましょう」とわざわざ遠回りしてくれました。さらに、その先に階段や坂道がないか走って見に行ってもくれました。とても優しい人たちだなと思い嬉しかったです。この優しさに触れて、ちょっとした出来事でも誰かの助けになれるのだと感じました。

僕は周りの人みたいに運動できるわけではありません。むしろ、できないことの方が多いです。でも、だからこそわかることがあります。できないことが多いと、他の人と比べてしまい不安な気持ちになってしまいます。しかし、できないなりに誰かの助けになれることもあるはずです。だから僕も、他の人の役に立てることを見つけて、誰かを気遣ってあげられるような、誰かのために遠回りできるような人になりたいです。不安な気持ちだった僕を勇気づけてくれた人たちのように、僕も勇気づけられる人になります。誰かを少し、ほんの少しでもいいから助けられるように僕は生きていきたいです。

優良賞
大分県教育長賞

私にとって大切なもの

佐伯市立直川中学校
二年　秦　聖来

あなたにとって一番大切なことは何ですか。私にとっては、今の私を創りあげてくれた「家族」です。私の家は、父・母・兄・姉・私・妹・弟・祖母の八人家族です。なんて大家族なんだろうと思うかもしれませんが、実は、私は里親家族の一員として育ってきました。つまり私の親は里親です。みなさんは里親とは何か知っていますか。里親とは保護者の病気や離婚・虐待など様々な事情により自分の家庭で暮らすことのできない子どもたちに、必要な期間温かい雰囲気の中で養育する家族のことです。里親制度とは、社会がみんなで子ども達を見守り育てていく子ども達のための制度なんです。

私は、二歳の時に今の家にきました。当時のことはあまり覚えていませんが、アルバムを見たり、その時の話を聞いたりすると、馴染むまでに時間がかかり大変だったことがわかります。この家には成人した兄と大学生の姉がいて、本当の妹のようにとても可愛がってくれました。今も仲良しです。

あれから十二年が経ちました。これまでこの家には私をふくめて十人の子ども達が来ました。新しい里子ちゃんが来た時は、とてもうれしかったです。

現在は、私の他に小学校二年生の女の子と、四歳の男の子が一緒に暮らしています。家はにぎやかで楽しいのですが、ケンカも多く母達は、とても大変そうです。でも両親は、子ども達と遊だり、いろんな所に連れて行ってくれます。とても楽しいです。反対に実親さんのところに帰ることになった子どもを見送る時は、うらやましいと感じたり、時には「帰っても大丈夫かな？」と心配になったりと複雑な気持ちになることもありました。

実親さんのところに帰っていく子ども達を見ると、私を産んでくれた母が、今何をしているのかが気になることもあります。どうして産んでくれた母と生活ができないんだろう、今、母はどこにいるんだろうと考えることもありました。そんな時は、母に話すと、気持ちがスッキリして落ち着きます。母はよく「我が家は、みんな違う家から集まってできた家族なんだよ。私もふくめてね。みんな、大切。」と話してくれます。私にとって、家に帰ると「おかえり」と言ってくれるこの家族が心強い存在なのです。うれしいことやいやなことがあった時に、それを分ち合うことができる家族が何ものにも代えることのできないものなのです。血のつながりがなくてもいつも一緒にいて私を支えてくれる、今の家族が一番大切なのです。この家族が大好きです。

私は、里親家族で育って幸せを感じていますが、現在日本では、約四万五千人の子ども達が、社会的養護のもとで生活しているそうです。里親には特別な資格は必要ありません。一番必要なのは子育て経験より愛情です。大切なのは家族でいること、気持ちがつながっていたら家族であり、色々な形の家族があっても良いのです。

母は「私みたいな人間が里親をしたら、他の人もできると思ってくれて、この社会にもっと里親が増えるといいな。」と話していました。里親は立派な人ではなく、子どものことを大切に思う人です。里子は特別な子どもではなく、たくさんの大人に愛されて育てられている子どもだとみなさんにわかっていただけたら、もっと里親が増えるかもしれません。

私にとって「家族」とは、今の私を創り上げてくれたとても大切な心のつながりです。これから先何があってもずっとつながっていたいと思います。

優良賞
共感賞

空気の読めない自分

竹田市立竹田中学校
二年　運天貫大

「お前って本当に空気読めんよな」

これは小学校の時にクラスメイトから言われた言葉です。学級目標を決めるための議論をしていた際、仲間の意見に向かって自分の率直な意見を伝えていた時のことでした。言われた直後は、そう言われた意味がよくわかりませんでした。

不思議に思った僕は、「じゃあ空気読むってどういうことだよ」と聞いたのですが、僕の質問に答えられた仲間は一人もいませんでした。

後から考えると、その時僕は仲間の意見に対し反論していたため、相手を否定しているように捉えられたことが原因なのではないかと考えました。結局、学級のほとんどの仲間が賛成している意見に対し、「決まりかけていることを無理に覆すな」という意味の内容を伝えたかったのでしょう。僕の中では実現可能な学級目標を決めるために、より良い意見を出しただけのつもりでしたが、返って来たのは「空気を読め」という意見を出すことそのものを否定する言葉。この奥に隠された思いは一体どういう気持ちなのだろうか。そう、強く疑問に思ったのです。

大多数の人が賛成し意見が決まりかけている時、おそらくほとんどの人が自分が持つ少数意見を伝えない、という選択肢を取るでしょう。それはきっと集団の中で個人の意見を貫くことに躊躇う気持ちから来ています。何より、私たち中学生は「議論」を否定的に捉えがちです。相手と異なる意見を伝えると「相手そのものへの否定」に受け取られ、友達との関係がうまくいかなくなってしまったことも誰もが少なからず経験してきているはずです。

反対意見を責めるような言葉、今出ている意見だけが最上のものであるという思い込みから激しい言葉が出ると、傷つくくらいなら意見は言わないようにしよう、と自分のからに閉じこもってしまう気持もよくわかります。

でも、僕はこう思うのです。

勇気を持って欲しいと。心無い言葉に傷つくこともあるけど、あなたの意志をはっきりと表現して欲しいと。

なぜならあなたが閉じ込めたその言葉は、世界に一つだけしかないあなただけの意見なのだから。

中学校に入学し、自分たちの生活について僕たち生徒が話し合って決定するという場面が増えてきました。僕は今、生徒会活動に興味を持っています。これを変えたほうがもっと学校生活がよくなる！と思って自分の意見をどんどん伝えていますが、提案した内容が受け入れてもらえることはほとんどありません。今までずっと続けてきたことを変えることはやはり難しいのか…と諦めた気持ちにもなります。しかし、僕の意見を聞いた友達や先輩、先生が「貫大はどうしてそう思ったん？」と僕を理解しようとしてくれることも確かにあるのです。僕はそんな時、本当に嬉しくなり、また頑張って自分の思いを伝えてみようと勇気が出ます。

意見を伝える、ということは、自分自身がどういう人間か、どういう考え方をするのかを伝えることです。周囲に同調することは、一見すると日本人特有の謙虚さの表れ、美徳のように感じるかもしれません。しかしそうではないのです。相手に自分の意思を伝えないということは、相手に自分を知ってもらうという唯一の手段を自ら放棄したことと一緒なのです。

私たちは今、ある岐路に立っています。

周りの目を気にして、からの中に閉じこもり、「空気」の読み合いに神経をすり減らすのか、扉を開いて多様な人々を受け入れ、新鮮な「空気」の中で、ともに生活を楽しむのか、という岐路に。このことを受けとめ、これから、どう考え、行動していくかはみなさん次第です。

僕はいつまでも、空気の読めない自分でいたい、そう思います。

優良賞

優しい世界に

竹田市立直入中学校
一年　足立優佳

私のクラスでは帰りの学活で「今日のＭＶＳ」という活動をしています。「ＭＶＰ」ならぬ「ＭＶＳ」です。今日一日、誰がよいことをしたのかなどを出し合う活動です。みんなが、誰の良いところを見つけて発表するのか、わくわくドキドキの気持ちで聞くその時間が、私はとても楽しみです。例えば「今日のＭＶＳはＡさんです。なぜなら教室の床を一生懸命ふいていたからです。」とか「難しい問題に、あきらめずに取り組んでいたからです。」などの意見が出ます。ちなみに私は、助けてくれたり手伝ってくれたりしたことを言うことが多いです。「Ｂさんがノートを一緒に持って行ってくれたからです。」や「Ｃさんが話しかけてくれてうれしかったからです。」など、ほんの少しのことでも、してくれたことにまず感謝をして書いています。また、このコーナーで自分が言われるときは、とても嬉しい気持ちになります。どうして自分が選ばれたのだろうと不思議に思うこともありますが、理由を聞いて「あー、なるほど」とか「そんな風に受け止めてくれるんや」などと思うこともあります。友達から言われると、「次もそうしよう」とか「もっとこんなことをしよう」と考えます。

この活動で出される意見はほんとうに小さなことです。そんな、普段あまり言葉にしない友達の良いところやがんばりを伝える「今日のＭＶＳ」を続けていると、もっとみんなの関係が深まる気がします。それに、友達のよいところを見つけられるということが身につくと思います。人の良いところを見つけることで心が優しくなり、みんなとの関係が温かくなると思うのです。この効果は少しずつ効いてきていると感じています。

話は変わりますが、私はＳＮＳをよく利用します。同じ趣味の人とつながれたり、いろいろな人と出会えたりして、とても楽しいものです。しかし、一方でネットの世界では誹謗中傷も多く、それが原因で亡くなる方もたくさんいます。人の失敗などを見つけ、攻撃する人が多いのです。私は、そんな小さなことで言わなくていいのにと思います。

そう思うのは、私が小学校一、二年生の頃にいじめられた経験があるからだと思います。何がきっかけだったのかは覚えていませんが、小一の頃は中休みも昼休みも遊びに誘われず、ずっと一人でいることが多かったです。たまに鬼ごっこに誘われても、私だけがねらわれてつかまるようにされていました。もちろん陰口を言われたこともあります。小二になると少しはましになりましたが、やっぱり私だけがねらわれて嫌な気持ちになり、泣きながら一人で帰ったこともありました。その頃はみんなが怖くなっていました。小三ぐらいから、気にかけてくれる友達や一緒に帰る友達もできました。時々、「もう一緒に帰らんけんな。」と言われることもありましたが、担任の先生や母が話をしてくれて、だんだんそんなこともなくなりました。この辛い時期は、「自分は必要な人間なのかな」と考えることもあり、しんどくて消えたいと思うこともありました。ＳＮＳの誹謗中傷で亡くなった人のニュースを聞くと、またあの頃の気持ちを思い出してしまいます。

私は今、友達と仲良くしていますが、いつまたいじめられるかと怖くなったり、人を信じられなくなったりするときがあります。でも、もしもそうなってしまっても、私のことをわかってくれる友達や助けてくれる先生や母が身近にいるということも知っています。何かあっても相手がわかるし、直接話もできます。ネットの誹謗中傷は、見知らぬ人からたくさん言われるので、解決は難しいと思います。

私は、いじめや誹謗中傷で人を傷つけるということが、この世からなくなってほしいと思っています。そのためには、相手を「批判する目」ではなく、「人の良いところを見つけられる目」を持つことが必要だと、「今日のＭＶＳ」を続けることで気がつきました。みんなの発表を聞いていると、優しくあたたかい気持ちになります。これを続けることで心が豊かになると感じます。

「話かけてもらったのがうれしかった」「落ちたペンを拾ってくれたのがうれしかった」…そんな小さな小さなうれしさをちゃんと言葉にして伝えること、そして、「集中して絵を描いているのがすごいと思った」「一生懸命そうじをしているのがかっこよかった」と、良いところを見つけられる目をもつこと、この二つのことを心がけて、人を傷つけない優しい人に私はなろうと考えています。そして、この考え方がもっともっと広がって、現実もネットも、優しい世界になってほしいと思っています。

優良賞

空手でわかった努力の大切さ

佐伯市立鶴谷中学校
二年　木許　樹希也

「お前と弟の違いはこれだぞ。」
と父は言った。
僕には、四つ下の弟がいる。僕と弟は、同じ時期に空手を始めた。しかし、僕と弟では、成績が全く違う。トロフィーの数も、賞状の数も、全く違う。悔しいことに、弟の方が成績がとてもいいのだ。道場の後輩からは、
「お兄ちゃんなのに、なんで弟の方が成績がいいの？」
と聞かれてしまったり、
「弟より弱いの？」
と聞かれてしまうことがある。悪気がないのはわかっているが、そう言われるといつも嫌な気持ちになる。僕だって決して成績が悪いわけではない。しかし弟より成績が悪いと、弟と比べられ、弱いと思われてしまう。
僕たち兄弟が空手を始めたのは、僕が小学校四年生、弟が幼稚園生の時だ。僕と同い年の選手たちは、弟と同様に幼稚園生や小学校一年生の頃に空手を始めた人が多い。だから周りの大人たちからは、
「始めた時期が遅いからしょうがない。」
と励まされることがある。しかし父は、
「始めた時期が遅いなら、その人の何倍も練習して追いつけばいい。」
と僕にいう。父の言葉に僕は、
「練習して本当に追いつけるのだろうか？」と不安になることがあった。
五月の九州大会で、僕は決勝まで勝ち進んだ。決勝の相手は、以前一本負けし、心まで折られた因縁の相手だった。「最悪だ」と僕は思った。「勝てないんじゃないか」と不安な気持ちでいっぱいだった。
試合が始まった。技の打ち合いとなり互角の戦いで、延長戦までもつれこんだ。以前よりも技が決まっていることは自分でもわかったが、体力は限界だった。二年ぶりの決勝に「勝ちたい」という強い気持ちで戦ったが、二対一で惜しくも敗れてしまった。悔しかったけれど、これだけ戦えて自分が強くなっていることを感じた。以前はすぐに試合が終わっていたのに、これだけ戦えたのは、毎日の練習を頑張ったからだと思う。空手の先生は、
「優勝はできなかったけれど、昔一本負けした相手にこれだけ戦えたのだから、強くなったことを実感しろ。」
と言ってくれた。そして父は、
「お前より練習しちょるやつはほかにおらん。よくやった。」
と言ってくれた。このとき僕は父の言った「始めた時期が遅いなら、その人の何倍も練習して追いつけばいい。」
という言葉の意味が初めてわかった。
今でもまだトロフィーは弟の方が大きいし、比べられることもある。しかし僕は弟を恨むことはない。勝っても調子にのらず、練習を続ける弟のことをすごいと思っている。そして僕は、負けても練習し続けるといういいところが、自分にはあると思えている。これからも弟とは、勝っても負けても励まし合える関係でいたい。
学校生活や日常生活のなかでも、自分よりテストでいい点を取っている人や、体力テストで、自分よりいい結果を残している人はたくさんいる。しかし僕は、その人を恨むことはない。結果よりも、努力に意味があること、その努力が結果につながること、結果を残している人は努力をしている人だということを、僕の大好きな空手と父から学んだからだ。これからも周りの成績や結果に左右されることなく、自分自身で自分のために頑張ることを続け、努力していきたい。

優良賞

私たちは臼杵守りたい（隊）！

臼杵市立西中学校
二年　木本優芽

「臼杵市の未来は私たちにお任せ！どんなピンチにも決して負けない。臼杵市民は私たちが守る。臼杵大好き、臼杵守り隊！」

これは、昨年度の総合的な学習の時間での学びを、文化祭でステージ発表した時の台詞です。

私は大分県の臼杵市に住んでいます。三〇年以内には約八〇パーセント程度の確立で起きると言われている南海トラフ地震の際には、臼杵市も地震や津波で大きな被害を受けると予測されています。そこで私たちは、「レッツ探究！防災・減災明日の臼杵のピンチに備える」をテーマに、様々な観点から課題を探究し、文化祭のステージ発表と手作りハンドブックで発信することにしました。

市の防災課の方や女性防災士の方からお話を伺い、臼杵市にも大きな備蓄庫があり、支援の物資が届くまでの準備があることを知りました。また、避難所を運営していく際には女性や子どもの視点も大切だということを教えていただきました。私たちは、体育館を避難所に見立て、避難生活の体験を行いました。パーテーションで仕切られたとても狭い空間で、何日も生活を強いられるのは耐えられない、と感じました。非常食を作ったり、簡易トイレやタオル帽子を作ったり、手作り濾過器で泥水をきれいな水にし飲んでみたりと、周りのものでも工夫をすれば、いざというときに役立つということも分かりました。班のみんなと調べた防災に関する看板は、三ヵ国語で書かれていて、外国の方にも優しい配慮がされていました。これらの学習を受けて、私の家でも避難所や避難経路の確認をしたり、家具につっぱり棒をしたり、防災リュックの確認をしたりしました。災害には遭いたくないけれど、十分な知識はあるし準備もできている。ちょっとした安心感が生まれていました。

四月十七日、二十三時十五分、臼杵市は震度四という地震に襲われました。元日に起きた能登半島地震の映像――激しく揺れて、崩れていく建物、津波、逃げる人々が頭の中をよぎり、「どうしよう。これはかなり大きい。このまま、家が崩れてしまったら……。」そう思い目をつむった瞬間、スマホの緊急地震速報が鳴り我に返りました。この地震で私ができたことは、自分の安全を確保したことと、津波の確認をしたことだけ。情けなかったです。現実は想像よりもはるかに厳しい。

私は時々、横山和佳奈さんのお話を思い出します。ズームでお会いした横山さんは、震災の語り部として、東日本大震災・原子力災害伝承館で活動されている優しそうな方でした。被災時は小学校六年生、大切な家族であるおじいさんとおばあさんを津波で亡くされたそうです。悲しい記憶、つらい記憶を語り継ぐのは、私たちに自分や自分の大切な人の命を守ってほしいから。大切な命を守る思い。大切な人を守る思い。私の周りにはたくさんの大切な命がある。

私たちがまとめたこの「防災・減災ハンドブック」を、近隣の小学校が学習会で活用することになりました。より多くの人たちが、防災のために準備をしたり、自分自身ができることを考えたりすることは大切なことです。

これからも私は、防災について学習し続けます。まずは、自分の身近な人を、臼杵に住んでいる人を守りたい。私たちは「臼杵守り隊！」。中学生にだってできることがある。多くの人とつながって、もしもの時に備える町づくりをしていきます。

優良賞

地域と共に生きる

佐伯市立彦陽中学校
一年　近藤花虹

私が住んでいるところは、お年寄りの多い地域です。近年では元気なお年寄りも多く、年齢を問わず地区の運動会に参加したり、毎週日曜日に朝市を開催したり、みんなで地域を活性化させようと力を合わせています。

そんな地域が大好きな私ですが、心配なこともあります。地域の高齢化が進み、お互いに助け合うことが難しくなっていることです。私の家の近所には認知症のおばあちゃんが住んでいます。私が犬の散歩をしているときや、学校の登下校、他にも買い物に出かけようとしたときに道路に出ると、必ずといっていいほど、おばあちゃんに出会います。天気も関係なく、雨の日も、夏の炎天下でも、冬の寒い日でも、ほぼ毎日のように歩いています。

私はおばあちゃんに会うと挨拶をするように心がけています。そしておばあちゃんも挨拶をしてくれます。おばあちゃんの調子がいいときは少しお話をしてくれることもあります。見かけたときは、おばあちゃんの様子を見て、「今日も元気そうだなあ。特に心配なことはないなあ。」と思っています。

これは、とても大切なことだと両親は教えてくれました。私は普段、「あまり力になれていない」と感じていました。しかし、両親の言葉で、地域の人がみんなで見守っているということが大事なのだと気づくことができました。

ある日、私が下校しているとおばあちゃんに会いました。しかし、それはいつも会う、家の近所ではなく、散歩コースから離れているところでした。私はそのとき、他の人に知らせる手段がなく、急いで家に帰って母に知らせることにしました。母がその後、車で様子を見に行くと、おばあちゃんが更に自宅から遠くに離れて歩いていく姿を見つけました。このままでは危険と判断し、消防団の父とおばあちゃんの家族に知らせないといけないと思いました。そのとき、偶然通りかかった近所の方も気になったのか、おばあちゃんを見守りながら家族の方に連絡をとってくれました。無事でよかったと心から思いました。

地域の方がおばあちゃんに認知症があることを認識し、特別なことをしなくても気を配って見守っている。この日の出来事は地域の方々のそんな「思い」を実感する出来事となりました。

以前、私が住む地域では別のおばあちゃんが行方不明になるという出来事がありました。昼間に居なくなったため、地域の若い人たちは学校や働きに出ていました。そのため、家族だけの捜索となり、動ける人が多くありませんでした。夕方になり、ようやく近所の方々の捜索が始まりました。みんなで力を合わせて捜索をしました。無事に発見され、そのときは意識もあったので大丈夫だと思っていました。しかし、高齢者が寒い中、薄着で徘徊していたため、思った以上に体力が奪われており、低体温症でその日の夜に亡くなってしまいました。発見がもっと早ければと悔やまれました。この件を通して、私の住む地域にもまだまだ課題があると実感しました。若い人たちが仕事などでいない時間帯は動ける人数も限られてしまいます。これから先、またこのようなことが起こる可能性も十分に考えられると思います。今後どうしていくべきかを考えさせられる課題だと思います。

今では、年に一度、行方不明になった人を捜索する訓練が行われています。この取組も大切なことです。みんなが連携して動ける体制を整える必要があります。

今の都会では隣にどんな人が住んでいるのか分からないと聞きます。私の地域とは真逆です。私の地域では誰が何をしているのかまで分かることもあるほどの距離感です。このことを強みにして「私ができる見守り、声かけ」を心がけていこうと思います。

みなさんもこれを機に、自分の住んでいる地域について考えてみませんか。

優良賞

挑戦は楽しい！

臼杵市立南中学校
三年　城　綾音

「楽しかったぁ！」この夏、私の二年間の挑戦が幕を閉じました。

私には「調節性内斜視」という目の病気があります。テレビを近くで見ようとしたり、眉間にしわを寄せ怒ったような顔をしていたり…。不審に思った母が私を病院に連れて行ってくれ、二歳半の時に診断されました。

この病気は、自分の力でピントを合わせることが上手にできません。そのため、物が二重に見えたり、遠いところや近いところがぼやけて見えたりします。ピントを無理に合わせようとすると、寄り目の状態になります。それを矯正するために眼鏡をかけているのですが、困ることはいろいろとありました。

教室の席は、いつも一番前にしてもらっていますが、左右に目を動かす動作が苦手なので、板書をノートに写すのに人より時間がかかってしまいます。一番困るのは体育の授業です。例えばバレーボールをしていても、ボールとの距離感をすぐには把握できないので大きく空振りをしたり、跳んでくるボールに気付かず頭にぶつけたりします。

友達からは「何で綾音ちゃんは眼鏡をかけているのに、一番前の席じゃないといけないの？」と言われました。チーム対抗のスポーツ競技では、「綾音ちゃんがいるとなぁ」という周囲の迷惑そうな雰囲気に傷ついたことが何度もあります。私はだんだんと、自分にはスポーツは無理なんだと思うようになり、順番を抜かされたりパスが回ってこなかったりしても、あきらめていました。

そんな私に転機が訪れました。中学校に入学しても部活には入らないつもりでしたが、見学だけは行ってみようと、卓球部を訪れた時のことです。先輩達がラケットを握らせてくれ、ゆっくりとした球を打たせてくれました。ラケットに球が当たると「うまい」と優しく声をかけてくれました。それは、スポーツは自分には無理だと思っていた私にとって味わったことのないうれしい経験でした。

そこから母の説得が始まりました。「卓球部に入部したい」と言うと、母は大反対しました。きっと、私の目では球技をするのは難しいことや、これまで私が運動面で周囲にからかわれ嫌な思いをしていたことを心配してのことだったのでしょう。それでも私は必死に説得しました。時には大泣きするほどでした。そんな私の熱意に母も根負けし、一学期の間は仮入部で様子を見ること、「自分には難しい」と思ったらすぐに母に言うことを条件に、ようやく入部を認めてくれました。

それからの二年間、私は一度も入部を後悔したことはありません。なかなか上手に打てず、試合に負けて泣いてしまうこともありました。そんな時顧問の先生から「泣くくらい悔しいと思える人は、きっと強くなるよ」と声をかけられました。その言葉を支えに、毎日練習に励んできました。一つの技ができるようになるまでに人より時間はかかりましたが、優しい先輩や仲間に囲まれて、楽しく練習を続けることができました。あんなに入部を反対していた母も、必ず試合の応援に来て、励ましの声をかけてくれました。

最後の大会。初戦は去年の大会で負けた相手でした。一本一本丁寧に打つことに集中した結果、気がつけば勝っていました。先生が「悔し涙を流したあの日から、本当にうまくなったね」と声をかけてくれました。応援席では母が手を叩いて喜んでいました。

県大会への出場はかないませんでしたが、「あの時入部をあきらめないでよかった、二年間楽しかった」と心の底から思えました。「自分には無理だ」と、いろいろなことをあきらめてきた私ですが、この経験を通して、挑戦することの大切さと楽しさを学びました。「挑戦は楽しい！」を胸に、これからも、たくさんのことに挑戦していきます。

内閣総理大臣賞

「一隅を照らす」

宮城県　栗原市立栗原南中学校
三年　ケイバージーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで三十五年もの間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学四年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」

「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、四年生からは、日本で生活しています。

六年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていた勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……。「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかったので、ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」そう思うことが何度もありました。どうしようもなくて泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人たちが話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありましたが、今は、日本で勉強ができていることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ語、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で（ګڼې ځلېږئ）。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。

講評

審査委員長
米田伸一

「自分の思いをことばで丁寧に伝えること」

本日、第四十六回を迎えられた「少年の主張大分県大会」で九名の方のご発表をお聞きし、一番に実感したことは、「思いをことばで丁寧に伝えること」のすばらしさ・大切さです。

二つのことからそれを実感しました。

一つは、このステージで発表された発表者おひとりおひとりの姿です。どの主張にも二つとない個性がありました。自分の出会った人、できごとに真摯に向き合い、そこで感じたこと、学んだことを踏まえて、これから自分がどんなことを始めようとしているか、どんな生き方をするのかを自分に問い、そこで見えてきたものをより確かなことばで丁寧に伝えようとする、その誠実な姿に、審査員一同、深い感銘を覚えました。

もう一つは、皆さんの主張の中に登場した、皆さんが出会った人々のことばです。学級の仲間や先輩のことばに、一歩を踏み出す勇気をもらった人がいました。家族のことばに、背中を押された人、自分の行為の価値に気づかせてもらった人、安らぎと深いつながりを感じた人もいました。また、地域の人のことばによって、身近な人のよさに気づいた人。講習会で出会った人のことばに、新しいものの見方、考え方を知った人もいました。

皆さんの声を通して、皆さんが出会った人々のことばを聞いていると、それぞれの方の優しい顔が目に浮かび、幸せな気持ちになりました。

日々の生活の中で出会ったさりげないことばを、中学生ならではのみずみずしい感覚で受け止め、新たな考え方に立ち、行動を起こそうとする姿は、まさに、ことばを通して、他者とつながり、よりよい社会を築いていこうとする姿そのものだと、頼もしく思いました。

○中学生にもできることがある、中学生だからこそできることがある。地域の多くの人々とつながって、もしものときに備える町づくりに力を注ぐ、頼もしい中学生の姿です。あなた方がまとめた防災・減災ハンドブックを通して、あなた方の思いは小学生に伝わっていきますね。

○自分も妹さんも、お互いが頑張っているからこそ、妹さんの小さな成長を心から喜べる。周りの人々のあたたかいまなざしやことばが、あなたの心をより豊かにしてくれていますね。自分の過去を見つめ直した時間は、あなたにとって尊い時間です。

○血のつながりはなくても、いつも一緒にいて支えてくれる家族が一番大切。いろんな形の家族があっていい、ということばには、お父さんお母さんと共に過ごした十二年の歳月によって築き上げられたあなたの揺るぎない家族観が表明されていました。

○殻に閉じこもり空気の読み合いに神経をすり減らす毎日を送るのか、それとも、扉を開いて多様な人を受け入れ新鮮な空気の中でともに生活を楽しむのか、・・・切実でまっすぐな問いが心に刺さりました。新鮮な空気を求めていく人でありたい、私もそう思います。

○誰よりも自分の努力する姿を知ってくれているお父さんのことばを胸に、周りの人の成績や結果に左右されることなく、自分のために頑張ることを続けたい、という決意、清々しく心から応援したくなりました。

○毎日のように地域のおばあちゃんと挨拶を交わす光景を想像して、あたたかい気持ちになりました。地域の人同士の距離感が近いことを強みにして、自分ができる見守り、声かけを心がけるあなたは、地域の人々にとって心強い存在です。

○できないからこそ、わかることがある。胸に響きました。自分のために遠回りをしてくれた仲間たち、今度は自分が誰かのために遠回りできるような人に・・・きっとなれます。自分の考えをしっかりもって学校を選択したあなた。主人公はあなたです。

○手話は特別なものではない、聴覚障害者の方が互いに笑顔で会話する姿が、新たなものの見方、考え方を教えてくれましたね。違いや困りを認め合い、支え合うこと、すぐ隣にいる人と心のことばで真の繋がりを築いていこうとする姿に拍手を贈ります。

○優しい人に、優しい世界に、そのために必要な大切な二つのこと、小さな喜びをちゃんとことばにして伝えること、周りの人の良いところを見つける目をもつこと、学級での地道な取組を通して、大切なことを自分の心に刻み、実践していく姿、爽やかです。

○スポーツのことで嫌な思いを経験したあなたが、卓球部への入部を強く願い、三年間挑戦し続けたかけがえのない時間。挑戦するということは新しい自分に出会える行為なのだ、ということを教えてくれました。

いずれの発表も、自分の伝えたいことを明確に

中学生審査委員長

佐伯市立佐伯南中学校
三年　清　松　叶　夢

九名の発表者の皆さん、とてもすばらしい発表をありがとうございました。どの発表も、自分の伝えたいことが伝わるすばらしいものでした。

それでは、共感賞を発表します。

中学生審査委員三名で慎重に審査した結果、共感賞は「空気の読めない自分」という演題で発表した竹田市立竹田中学校の運天貫大さんに決定しました。

運天さんの主張を聞いて、空気を読めないと言われたことから考えを深めて、自分の意見をしっかりと貫くことの大切さを訴えた主張にとても考えさせられました。

私たちの周りにはこのようなことが多く、周りの目を気にしてみんなの意見と合わせるのではなく、何を言われても自分の意見を言うことが大切だというところにとても共感しました。

他の皆さんの発表にも多くの共感を得ることができ、また、たくさんのことを学ばせてもらいました。大変ありがとうございました。

し、それをより的確に伝えるために論理的な構成を心がけ、演題にも工夫がありました。相手に伝わる話し方も含め、日頃の学習の成果が見事に表れており、指導された先生方のご労苦が実を結んだ時間でもありました。

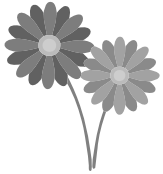
大会の素晴らしい空気を一緒につくってくださった会場のみなさま、そして、関係者の皆さまに心から感謝を申し上げます。

「今より少し丁寧に、日常を生きてみる。そして、今より少し丁寧に、思いをことばで伝えてみる」

九名の発表者から受け取ったメッセージを、ここにいる皆さまと一緒に実践していくことで、幸せを感じる心が育ち、広がっていく、そんな気がいたします。

明るく力強い発表をしてくれた九名の方々、そして、熱心に主張に耳を傾けてくれた佐伯市立南中学校、米水津中学校、鶴見中学校の皆さんひとりひとりの明日に心からのエールを贈り、講評といたします。

ありがとうございました。



佳作入選作品

● 将来の夢	赤松　華子	宇佐市立西部中学校一年
● 国への偏見	秋吉　優月	佐伯市立鶴見中学校二年
● 自分から	穴見　星夏	竹田市立緑ヶ丘中学校三年
● みんなちがってみんないい	有吉　嶺太郎	九重町立ここのえ緑陽中学校二年
● 雨のち虹	上野　沙彩	玖珠町立くす星翔中学校三年
● 死について	菊川　友希菜	佐伯市立米水津中学校三年
● 海のゴミについて	呉屋　潮音	日田市立津江中学校一年
● 弱さとは	佐藤　咲良	竹田市立竹田中学校三年
● 経験から学んだこと	髙橋　遼	九重町立ここのえ緑陽中学校三年
● 「特別扱い」と「配慮」	筒井　陸仁	大分県立大分豊府中学校三年
● 本当の「友だち」へ	長田　彩良	宇佐市立北部中学校二年
● 僕が今がんばっていること	中根　瑠来	別府市立別府西中学校一年
● 私の大人の理想像	花水　咲空	宇佐市立長洲中学校三年
● なりたい自分に近づくために	姫嶋　芽映	九重町立ここのえ緑陽中学校二年
● もっと給食に感謝しよう	矢澤　季雄	別府市立別府西中学校一年
● 伝えることで	渡邉　結花	竹田市立竹田中学校三年

大会のようす

米田審査委員長による講評

中学生審査委員から
共感賞を授与

アトラクション
（やよい栂牟礼
陣太鼓保存会による演奏）

審査委員会

最優秀賞を受賞した蔵下祥貴さんの発表

少年の主張県大会

蔵下さん最優秀賞

最優秀賞に輝いた蔵下祥貴さん＝22日、佐伯市鶴見沖松浦の鶴見地域コミュニティセンター

第46回少年の主張県大会が22日、佐伯市鶴見沖松浦の鶴見地域コミュニティセンターであった。中学生がそれぞれの思いを発表し、最優秀賞に蔵下祥貴さん（13）＝宇佐2年＝の「心の言葉」が輝いた。

県青少年育成県民会議と国立青少年教育振興機構が毎年開いている。本年度は県内27校の1868人が応募し、校内選考、書類審査を通過した10人（体調不良で1人欠席）が発表した。別府市教育相談センター教育相談員の米田仲一審査委員長ら5人が審査した。

蔵下さんは宇佐市の講座で手話を学んだ。障害者との出会いから気付いたことなどを振り返り、「壁のない関係は築ける。心は届く。心の言葉が心をつなぐ」と語りかけた。

蔵下さんは県代表として九州ブロック審査に臨む。

その他の審査結果は次の通り。

▽優秀賞　河野[illegible]（豊後高田市田染3年）佐藤[illegible]（別府西1年）▽奨励賞　木本[illegible]（臼杵西2年）[illegible]（佐伯市[illegible]2年）▽[illegible]賞　[illegible]（竹田2年）[illegible]（佐伯市鶴谷2年）[illegible]（佐伯市[illegible]1年）[illegible]（竹田市直入1年）[illegible]（臼杵南3年）▽県教育長賞　[illegible]▽[illegible]賞　[illegible]

（安部亮）

令和６年８月23日（金）大分合同新聞21面掲載

この記事・写真等は大分合同新聞社の許諾を得て掲載しています。

令和六年度（第四十六回）「少年の主張大分県大会」実施要綱

一　目　的　中学生が日常生活等で考えていることを広く社会に訴える機会を提供することにより、広い視野と柔軟な発想や創造性を養い、物事を論理的に考える力や豊かな表現力などを身につけさせ成長を促すとともに、青少年の健全な育成に対する県民の理解と関心を深める。

二　主　催　大分県青少年育成県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構

三　共　催　大分県・大分県教育委員会

四　後　援　佐伯市・佐伯市教育委員会・佐伯市青少年育成市民会議・大分県市町村教育委員会連合会・大分県中学校長会・大分県中学校文化連盟・大分県教職員組合・大分県ＰＴＡ連合会・大分合同新聞社・ＮＨＫ大分放送局・ＯＢＳ大分放送・ＴＯＳテレビ大分・ＯＡＢ大分朝日放送・エフエム大分・J:COM 大分ケーブルテレコム

五　応募対象　県内の国・公・私立の中学校、義務教育学校及び特別支援学校中学部に在籍する生徒（国籍不問）

六　開催日　令和六年八月二十二日（木）　十三時三十分～十六時三十分

七　開催場所　佐伯市鶴見地域コミュニティセンター

八　実施内容

①発表内容

ア　社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ　家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ　テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

右記のような内容で、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどについて、少年らしい自由かつユニークな発想で、飾り気のない言葉を使ってまとめたもの

②発表時間　一人五分程度とし、日本語で発表できること

③発表者　審査の結果、選出された十名

④表　彰　県大会発表者の中から、最優秀賞（一名）、優秀賞（二名）、優良賞（七名）に賞状と副賞（盾等）を贈呈。特別賞として大分県教育長賞（一名）、共感賞（一名）に賞状と副賞（盾等）を贈呈。また、佳作受賞者には、県大会終了後賞状を贈呈。

⑤全国大会　最優秀賞受賞者は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催し、令和六年十一月二十四日に東京都で開催される「少年の主張全国大会」に大分県代表として参加する。さらに、事前の審査で九州ブロック代表（二名）に選出された場合は、全国大会に出場し、発表する。

九　問合せ先　大分県青少年育成県民会議事務局（大分県生活環境部生活環境企画課内）
〒八七〇－八五〇一　大分市大手町三丁目一番一号
電話　〇九七－五〇六－三〇八〇

「少年の主張大分県大会」審査基準

【最優秀賞・優秀賞・優良賞】

次の四項目について、各項目ごとに審査（採点）し、その合計得点（審査委員一名あたり五十点満点 × 五名＝二百五十点満点）を基に協議し、各賞を決定する

①論旨（二十点）
- 自己の意見・希望など論旨が一貫していて、明瞭であるか
- 批評でなく、自らが現状を改善していく姿勢が出ているか
- 中学生らしい新鮮な発想や柔軟な創造性があるか

②構成（十点）
- 感動や共感を与える内容の濃さや構成の工夫があるか
- 体験談等の主観的要素と広い視野等の客観的要素のバランスは良いか

③表現・話し方（十点）
- ことばが明瞭で、聞き取りやすいか
- 論旨や伝えたいことを上手に表現できているか
- 感情や感性が伝わる抑揚があるか（演技過剰や棒読みではないか）
- 話し方に熱意や迫力が感じ取れるか

④発表態度（十点）
- 少年少女の代表にふさわしい品位があるか
- 制限時間を守り、かつ時間を有効に使えていたか
- 観客席を向いて話せているか（原稿を演台に置くのは許可している）

【県教育長賞】

- 前述の審査基準とは別に、審査委員からみて「特に中学生として独創的な意見、新鮮な意見」を発表したものに授与する。
- 他の賞との重複受賞も可とする。

【共感賞】

- 中学生審査委員全員で協議して、「最も共感した」ものに授与する。
- 他の賞との重複受賞も可とする。

選考経過

事項	実施日	場所	審査委員	審査状況	摘要
一次審査	六月二十四日～七月三日	各教育事務所等	各教育事務所の指導主事等	管内応募者の中から五名以内を選考した。	各中学校で三編以内を選考し、各市町村教育委員会を通じて各教育事務所に提出した。
二次審査	七月十八日	県庁内会議室	大分県青少年育成県民会議　副会長　荒金　淳 大分合同新聞社　編集局次長兼地域報道部長　木本　崇 大分県中学校国語教育研究会　会長　小野　寛也 大分県教育庁義務教育課　課長補佐（総括）　瀧口　忍	一次審査を経た応募者の中から、県大会出場者十名を選考した。	各審査委員が事前に評価し、審査会で協議して選考した。
県大会	八月二十二日	佐伯市鶴見地域コミュニティセンター	別府市教育相談センター　教育相談員　米田　伸一 大分県青少年育成県民会議　副会長　荒金　淳 大分合同新聞社　編集局次長兼地域報道部長　木本　崇 大分県教育庁　佐伯教育事務所長　溝口　恵美 大分県生活環境部　生活環境企画課長　小野　高寛 《中学生審査委員》 佐伯市立佐伯南中学校　三年　清松　叶夢 佐伯市立米水津中学校　三年　菊川　友希菜 佐伯市立鶴見中学校　二年　秋吉　優月	審査委員が発表者十名（うち一名は体調不良により欠席）の中から、最優秀賞一名、優秀賞二名、優良賞七名を決定した。 また、特別賞として、審査委員が大分県教育長賞一名を、中学生審査委員が共感賞一名を決定した。	主張発表の後、表彰式を行い、各受賞者に賞状と副賞を贈呈した。

大分県青少年育成県民会議
〒870-8501　大分市大手町3丁目1番1号
大分県生活環境部生活環境企画課内
TEL（097）506-3080